

## Ⅱ 児童生徒のキャリア発達を促す 授業実践

## Ⅱ 児童生徒のキャリア発達を促す授業実践

1. はじめに	19
Ⅱ－1 小学部の実践	25
Ⅱ－2 中学部の実践	51
Ⅱ－3 高等部の実践	73

## Ⅱ 児童生徒のキャリア発達を促す授業実践

### 1. はじめに

本校では、今年度も各部署で児童生徒のキャリア発達を促す授業実践を行った。

過年度の実践は、Ⅰ章－3（4～11ページ）で述べたとおりであるが、その成果と課題を受けて、今年度は授業実践を行う際に、以下のように充実改善を行った。

#### 【授業実践にあたって 二年次（平成27年度）の研究からの引き継ぎ】

三年次（平成28年度）は、例年より多くの授業実践を計画・実行し、まとめることができた。実践の詳細はⅡ章－1小学部の実践、Ⅱ章－2中学部の実践、Ⅱ章－3高等部の実践にて述べる。紀要に記載した実践の他にも平成28年12月現在、各学部において3学期に向けた授業実践を計画中である。授業実践の対象となる学習集団も小学部では低・中学年を合わせた集団、中学部・高等部では各作業グループへと過年度よりも広がり、様々な実態の児童生徒についてのキャリア発達、及びキャリア発達を促す授業を考えることができる機会となった。

教師が児童生徒の内面をどのように推察しているのかを学部外の教師や学校外の方々に提示できるように、児童生徒の行動や言動などから内面を把握するための様式（様式2）は二年次（平成27年度）より作成し、各授業実践で授業検討のために使用してきた。（様式2）については三年次（平成28年度）から書式を一部変更したものも作成し、使用した（様式2改）。「キャリア発達支援を促す授業作り」の実践に取り組む三年次（平成28年度）からは、教師の授業検討をより深めるため、部研究会での授業検討の際に（様式1）、（様式2または様式2改）の他に授業の様子を撮影したビデオも併せて使用し、児童生徒の内面の推察や見取りを教師集団でより共通理解しやすくした。

実践の話し合いの中では、教師各人が児童生徒の内面の推察や見取りについてそれぞれの意見を出しあった。様々な生活場面、これまでの経験等から児童生徒の全体像を捉え直しながら、内面の推察がより妥当なものになるよう、多面的に児童生徒の姿に迫ろうと努力した。また研究授業を検討、実践し、振り返る過程で、これまで各授業の基本形として考えられてきた授業集団一律の活動や振り返りが適当ではない場合もあると気づくことができた。教師は、各々がメインティーチャー（T1）として実践の中心的な役割を担うという意識をもって研究会での話し合いに参加できた。研究授業の指導案は、学部内の教師が意見を出し合い、授業内容や児童生徒のキャリア発達支援のねらいを共通理解して検討できた。研究授業整理会も感想を述べあうだけではなく、児童生徒の実際の授業への向き合い方や取り組み方、行動や発言がどのような内面からくるものなのかテーマを挙げて協議し、授業作りについて評価しようとした。

#### 【キャリア発達の捉えや児童生徒の「内面」の変化を効果的に示すために】

三年次（平成28年度）実施した研究フォーラムでは、講師の菊地一文氏（青森県教育庁学校教育課特別支援教育推進室指導主事）からキャリア発達を促す授業作りをより充実させるために次に挙げる助言をいただいた。

キャリア発達は能力や態度を育てる教育ということではない。ただ知識を身につけさせるのではなく、子どもたちが学習活動を通して力をつけていくことによって、キャリア発達が促されていくのである。

子どもたちが遊びの指導・作業学習の時間の中で、活動を通して、その中で求められている自分なりにできることを通して、そこにどんな思いをもってやっているかというそのもの。だからキャリアではよく「アップもダウンもない」と言われる。

「発達」というと高まっていくとかできるようになっていくということのみに目が行く。しかし、実は誰もが生きていく中でつまづきもあるし、ネガティブになることもある。そこと折り合いをつけながら、次の活動とか次の学習で何らかの変化が自らできてくる。そのあたりをどうやって支援するかになると思う。

だから、やはり、ある1点を捉えるだけでなく、そのことの事後の変化ということを追っていきたい。そういう意味では話題提供の示し方として、BEFOREとAFTERというか、プロセスを追っていくことが非常に必要かと思う。

－平成28年度本校教育フォーラムでの菊地一文氏講演より一部抜粋－

菊地一文氏からの助言により、授業実践で「ある授業の1点における児童生徒の内面を分析する」だけでなく、「単元を通じた時間的な流れや空間的な広がりの中で内面を捉え、キャリア発達として何か変わっていくものを追う」ことを示す視点が必要だと分かった。研究フォーラム後の授業実践では、“授業作り”を「単元に入る前の教師の話し合いや授業計画」から、「実施や改善を繰り返していく単元中の各授業（授業後の教師の話し合いを含む）」を経て「単元後の評価・振り返り、次単元の展望」までのセットと考えることとした。

授業作りをまとめるにあたっては、「児童生徒の学びのプロセス」と「教師の授業作りのプロセス」の2つの視点を用い、いつ・誰が・どこで・何のために・どのように・何をしたのかを整理した。これらの計画や活動と評価を教師が部研究会等で検討しやすくするための様式を作成し、使用した〈授業作りシート〉。

〈様式1〉、〈様式2〉、〈様式2改〉、〈授業作りシート〉は、授業作りを有効に実践するための一つのツールであり、記入・作成することが目的ではなく、実施学部・クラスの実情や授業実践の形態に合わせて利用しやすいものを選択でき、利用方法も自由にすることとした。実践での試用の結果、どの学部、どの授業にも対応できるようなものにはならなかったが、今後も授業作りの実践を進め、授業形態に適したものを取捨選択して使用したり、より使用しやすいものを作成し直したりしたいと考えている。

〈様式1〉

■単元（題材）について

単元（題材）名	
単元（または題材）の目標 （学習集団全体）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・【 】</li> <li>・【 】</li> <li>・【 】</li> <li>・【 】</li> </ul>



■対象児童生徒について

対象児童（または生徒）名	A男（またはA子）
児童（または生徒）の実態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・</li> <li>・</li> </ul>
単元（または題材）の目標	・【 】
手だて・支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・</li> <li>・</li> </ul>
評価規準 （どのような様子が見られ たら、単元の目標が達成 されたと判断するか）	・【 】



■評価について

単元の目標が達成されたか	
学習活動を通して、 「内面」にどのような変化 が見られたか	
目標は適切であったか	
手だてや支援（単元の目標 を達成するための方法）は、 妥当であったか	



〈様式2改〉

月日	教師の手だて・支援	児童生徒の学習活動の様子 (A男)	児童生徒(A男)の内面(推察)	
			要求、知識、自己認識、自己効力感、その他	見取り、捉え、その他

〈授業作りシート〉

授業名

平成 年 月 日 ( )

( ) 時間目

場所 ( )

<単元名>  
«単元の目標»

単元計画

	美 態	めあて・予測	支援	活動の様子、発言	振り返り	今後
	<p>[今回の授業]に関係する 児童生徒の経験、芸術・興味 内面の推察(要求、既存知識、自己理解、 自己効力感など)からの見取り</p>	<p>[今回の授業]で育てたいこと [今回の授業]で伝えたいこと 4観点(関心・意欲・態度・判断・表 現、技能、知識・理解)のこと 予想される姿、発言</p>	<p>授業で取り扱う活動 効果的と考えられる支援 支援の要因 環境設定</p>	<p>内面の推察からの見取り 対話 発言 行動</p>	<p>生徒の自己評価 生徒間の相互評価 教師からの他者評価</p>	<p>[今後の授業]への申し送り 課題 アイデア など</p>
全体						
A 男						
B 男						
C 男						
D 男						